

東京 IPO 特別コラム

2017年8月22日 Vol.94

調整ムードが続くお盆休み明け相場とIPO銘柄投資

お盆休み明けの株式相場は相変わらず北朝鮮からのミサイル発射声明への恐怖が市場を覆っており、積極的にリスクテイクする展開にはなっておらず、調整ムードが漂っていますが、こうした状況を見極めながら徐々にリスクを取ろうとする投資家が出てくるものと期待されます。日経平均を見ると2万円の大台に乗せた後に頭重い展開を余儀なくされていますが、東証2部指数は引き続き高値圏にあり、JASDAQ指数とともに中小型株相場の強さを物語っています。投資家はミサイルの恐怖とともに株価下落の恐怖を感じてやや投資マインドを委縮させているようですが、ここから年末にかけての相場展開の中でリスクテイクするチャンスが来ていると思われれます。

さて、2017年のIPO市場には1月27日マザーズ上場のシャノン(3976)から8月9日上場のランザス(6696)まで45銘柄が登場。公開価格に対しての初値形成は概ね堅調ながら、銘柄ごとに変動のパターンは異なりますが、直近の相場はその多くが初値やその後の高値を大きく下回る展開となっています。上場時に関心を集めた銘柄も時間の経過とともに投資家離れが起きがちですが、これは過去から今日に至るまでIPO市場の基本的な特徴でもあります。IPO銘柄に絶えず関心をお寄せの投資家の皆様にとって、そうした局面は歓迎すべき期間です。上がってばかりの株価ではなかなかついていくのは大変ですが、企業の内容が悪い訳ではないのに株価だけが独り歩きで下落しているのであれば、格好の投資チャンスだと言えます。もちろん企業業績が想定より悪くなったのであれば一定期間は値下がりトレンドを余儀なくされるでしょうが、会社の存亡に関わるほどの業績悪とならない限りは復活の道は残されています。

IPO後の企業運営がうまくいっているのに株価だけが冴えないというのはIRの問題でもあります。2017年のIPO45銘柄のうち、十分に投資家に認知されない中での株価低迷はIRセミナーやメディアでのアピールなどでリカバリーできる可能性があります。IPOしたばかりの企業はその多くは基本的には戦略的なIRを行っていないと考えられます。これには相応の費用がかかりますので致し方ありませんが、中長期で成長を目指すIPO企業は調整局面でこそ、自社のPRに努めながらファンづくりを行っていくべきだと思われれます。

本コラムでは6月21日に札幌アンビシャス市場にIPOしたエコモット(3987)のご紹介を致しましたが、上場後に右肩下がりでの株価形成が続く中で、彼らが選択した対応策は株式分割でした。流動性がない中での株価下落への対応ということで、9月30日現在の株主に対して2分割を行うと昨日の11時半に発表しています。株式分割では既に仮想デスクトップのアセンテック(3565)が今期の業績上方修正と8月末の株主に2分割を実施すると発表し、その後の株価上昇が見られます。上場してから下落傾向が続く銘柄にはIRへの積極化とともにこうした流動性を高める施策を打ち出してほしいと思います。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)